始

特116
624

大正
13. 5. 22
内交

詩集萬物昇天之目次

佐藤春夫序……一
著者序詩……九

詩

萬物昇天之賦……三
太陽に成つて見せる……五
孕める處女體……六
「永遠」の設計……八
委された天體の支配……一二
臀部禮讃……一四

夢幻境……一五
眼　球……一八
プラチナの洋杖……二〇
結　句……二二
犬……二四
MENSTRUATION……二六
男……二九
樹木――男……三一
人形は産みつゞける……三四
酒　酒　酒……三六
考へる男……四二
心……四五

この一瞬……五五
夢を喰ひ破る……五八
「明日」の假面……六一
二つの翼……六四
斑馬と裸娘……六八
月を取らうとする男……七一
蒼白い臭氣……七四
糜爛……七七
荒野に墓を發く……八〇
小汚い運河……八二
三人のバガボンド……八五
暗紅色の氷柱……八七

異様な啼鳴……103
SPHINX……(終)

詩集萬物昇天に序す

佐藤春夫

「相川俊孝は天才の出來ソコナヒだね」

これは、僕が彼を見ること兩三度の後に彼の親友室生犀星に對つて歎じた言葉であつた。僕は自分の言つた言葉をつひもう忘れてゐた。しかし室生君――僕よりももう一層相川君に近しい室生君は僕のその言葉を未だに覺えてゐて流用してゐたところを見ると、僕のこの評語は或る程度まで當つてゐるのであらう。

ともかくも彼は凡庸の徒ではない。見るから猛々しい男性的な風貌を具へてゐる。ただの人間の顏といふよりも神と獸との混血兒たる人間の顏をしてゐる。その話聲と言ひ、その語るところと云ひ一つ一つ非凡である。彼は僕よりは五つ六つの年上である筈だのに、

打見たところ僕より五つ六は若さうに見える。その語り出すところの話題なり句調なり、どうしたつて二十三四の青年とより思へない。これが三人の子供の父だと聞いては誰だつて驚歎するだらう。それほど彼は若々しい。永遠の青年である。さうして青年のやうな一途と非常識とを持つて、刻々の衝動のままに躍進する。その内に一毫の世俗的な妥協もない。その男性的な勇邁な常に前方をのみ見つめてゐる彼の態度はまさしく非凡なる人——天才の面影を具へてゐる。それじや僕は何故に彼を天才だと言ひ切らないのか？ 少し僕に獨斷的なことを言はしてもらひたい——寡聞なる僕ではあるが、その僕がすべての天才を、その事業を思ひ出

して見るに、彼等は恒に前進してやまないと同時に、その前進することがいつでも同時に以前の彼自身の立派な後始末にもなつてゐる。即ち、彼の新らしいプロオグはやがて古い彼のエピロオグである。——彼等が意識的にそれを心掛けたのだか、それとも期せずしてそれがさうなつてゐるのだかは知らないけれども。ところで我が相川俊孝君に到つては、彼の躍進たるや決して前述の天才そのものの前進のごとくではなく、實にあとさきの無いめちやめちやなものらしいのである——僕は彼自身からその自叙傳を聞いたし、また室生犀星からしばしばその逸話を聞かされて、この斷定を自分だけは信じてゐる。併し、ともあれ、目ざまし

いのは彼が何か新らしい生活の題目を見出した瞬間に
それに飛び掛つて行く時の、その熱狂的な發足である。
しかも刻々に目標の變化するところの彼はつねに何か
理想の片影を追ひながらも、彼の前進は第三者の目に
はただ醉漢の活躍的な彷徨に似てゐる。さうして彼自
身の眞面目にも不拘、それがしばしば傍人にはただ面
白いものにしか映じないかも知れない。何といふカリ
カチュラだ！

然もそれは天才のカリカチュラである！

餘人は知らず、僕はこのカリカチュラを見てただは
笑はない。笑つてから深く歎美する——僕自身は追憶
的なセンチメンタルな人物であるが故に、自分の反對

なものを。

以上、僕は相川俊孝の横顔を實に粗末な線でではあ
るが、相當に描き得たつもりである。さうして彼の詩
がまた彼の爲人そつくりなものであることを讀者は見
るであらう。彼自身もその激しい衝動と無目標とを知
つてゐるのであらう——「序に代へて」のなかに彼自身で
書いてゐる。——ただ方向だけである。——目的地な
どといふ定限された場所を考へやうとも、また考へた
くもないからである。」と。さうだ、我にもただこの跛
行する巨人の足音だけを、その面白い意味のあるリヅ
ムだけを今は聞くことにしよう。——さうして僕は、
この小悧巧な手さきの氣の利いた詩工の多い時代に、

ともかくもかかる性格的な根の生えた詩人の一人を持つことを何より愉快に思ふ。

行け。相川俊孝君。この微小なる我々の惑星の上を彷徨しつくして殘る隅なかれ。

一九二四年三月下旬

佐藤春夫

著者序詩

この七八年
私に絡む不眠の夜
そは文字通りの單獨境
自由の靈の躍るとき
怪しくも放射する光の言葉
これらの詩篇

あまりに強く
必然で
そして不思議な
あるものの支配よ

いつでも飛ばう！
魂の躍る方へ
目的地——
そは地上に投げ棄てたる
不用の陰影か
私の前に跡方もない

詩集

萬物昇天

相川俊孝著

萬物昇天之賦

第一日　子宮昇天焉
　　眞紅眞紅
第二日　飯櫃昇天焉
　　燦々燦々
第三日　獸群昇天焉
　　叫喚叫喚
第四日　野次輩昇天焉
　　呶號呶號

第五日　高物昇天焉
續又續
最終日　昇天昇天焉
有邊際無邊際

太陽に成つて見せる

マツカな部屋の眞中だ
衣は炎
赤道直下
ABSINTHE と GETUKEI を
飲み拔いて
俺は
太陽に成つて見せる

孕める處女體

五月
男の血狂ふ五月
捲きあげる炎か――そは葉綠の香り
まさしき正午
其處に一筋の小川走る
青空ふかく眠り
女の髪毛くろぐろ藻草に絡み

白日の眞底に搖ぎ亂れる
その流れに私は見た
肌に處女が有つ全きふくらみを誇り
まつたき羞恥を投げ飛ばし
あまりに自然に
露き出されたものを
おお　なんと處女らしい屍體か
しかも見事に孕んでゐることよ

「永遠」の設計

――現在日本の藝術家諸君に贈る――

捏ねあげないで
彫塑家だちよ
其の粘土を喰つちまへ！
そんなにチューブを搾るのぢやない
畫家だちよ
ひねれと云ふのは
お前だちの首の事だ

さあ　文士だち
インクを飲め
氣が變になるまで飲みつづけるんだ
狹い舞臺をうろうろするな
俳優だちよ
はやく折れ！　向脛を
その向脛を叩き折れと云つてるんだ
敲け！　敲け！
音樂家だちよ　石油鑵を
そして悲鳴をあげろ！
みんな御苦勞だつた

さあ　一休して
ゆつくりと考へやうではないか
「永遠」の設計を

委された天體の支配

いま俺に
天體の支配が委された

さあ　始めるぞー
太陽のかはりにお轉婆娘を
月のかはりに生ま白い
ヒステリクな女を
散らばる星は

みな金貨

おお　氣まぐれな彗星
不思議な光芒で身を飾り
チラリと
俺は見て廻らう

臀部禮讃

女體
見るから惑はしい
それ自身――不可思議な力

知つてゐる
惠まれたる生體よ
女だちよ
言葉を使つてはいけない

そは天を漬すものだ

魅力よ　表情の根源よ
完備せる臀部よ
そは地上に許されたる唯一の殿堂
いま男性は
此の殿堂に拜跪する

夢幻境

濃淡強弱無數
陰影　光線　投影
放射し結束し組立てられ
動搖又反射
定型に不定型に不斷に發展し
瞬時に消滅する大多面角
捕捉し難き大夢幻境

整調缺く驚嘆すべき PIPE ORGAN
過剰する無邊の暴力
無形の大魔手鍵盤粉碎
幻像を蹴飛ばし表現する
人類發生以前の生物
怪奇そのものの悲鳴　搭闘
そして慘虐の色調
如何に間斷なく狂奔する大噪音か
捲きあげる不快の渦狀

透明に閃き端的に伸び切り
伸び延びる白金尖針

一身閃光と成り大都市を行く
四邊に氣流を粉碎し
環境に萬物を擘きながら
閃々又煌々
吾れいま大都市を往く

對立する萬物象
忽焉　充塡性を爆失し無に切迫し
一塊と化し只鈍重
脚下に愕く可き大唸音を發聲
發火　刹那只濛々
一身歩みつづける鋭角に

激しく煌き
蹴飛ばしながら
專念歩みつづける
これ大夢幻境　大都市

眼球

眼球　眼球
大眼球
底から覗く大眼球

斜視と亂視の大眼球
その盲膜に
紙を貼れ

プラチナの洋杖

皮膚から一分も掘り下げない
表面を辷つて
彼奴らの謂ふ「悧巧」が
キラリと煌くとして
それが何だ

俺に

タツタ一本の
プラチナの洋杖を與へろ！
其れで白晝
文字通りな子午線の眞下で　確かに
群衆の眼前で俺は
敲つて見せる
カタツパシから手當り次第に
その洋杖で撲りつけるんだ

想像しろ！
あやまつて俺の手をすべつた
その洋杖が――プラチナが

大地に落ちて透きとほる響を放つ
その瞬間を
群衆は
俺を取り巻く群衆は
刹那に俺の暴行を打ち忘れた群衆は
此のプラチナの奪ひ合ひを始めるのだ
彼奴らが其れを
手に握つたとき歡呼をあげるのだ
そして拜跪するのだ
このプラチナに　この洋杖に
俺は知つてゐる

あまりに知り拔いてゐる

結　句

結句
人々の言葉に過ぎないものか

「それらの諸相こそ……」と
悧巧ぶるも
嚴肅で餘りに悲しい遊戯であるか
道程か　全部か

それそのものであるのか
または其れ以外か
核心か
とりとめなく際限しない循環

思ふ　感ずる　認める
時　力　命
光る　動く　止る　移る　變る
色　目方
形　質　容積

他人が訊く

「あなたは
今年お幾つにお成りですか？」

犬

犬
犬だ
眠つてゐる
黒い犬
路傍

大道　私　光
白い——強く射る
貫禁間　私
私だ
歩いてゐる

犬
眠つてゐる　ぢつと
黒い　黒　黒　黒
黒
黒犬　陰影　路傍

私　歩く
歩いてゐる
私
私は歩いてゐる

MENSTRUATION

骨盤
碎けさうな疼痛
激烈な發作

叫んだ
夜中　下宿の出來事
隣室の男飛び込み

飛び出す
醫者が來た
「これは陣痛だ
すぐ產れるのだ」
產婆が來た
仰向けにねかされた
烈しく痛む
眼が眩む
死にさうだ
唸聲が非常に遠い
自分のもので無いやうな氣がする

主婦も親爺も
下宿人全部がわいわい喋返つてゐる
「見事な男の子だ
いつたい誰れの子だらう？
「見掛けによらないものだ　なあ
あんな顔で」
「誰れが見たつて
生娘だ」
誰れかが云ふ

顔を揃へて覗き込んでるのが
目を瞑つてゐてハツキリ判る

急に羞恥が込みあげる
「生れたんだ」
「妾が產んだんだ」
「たれの子だらう？
やはり妾が產んだんだ」

ベツトリと全身に脂汗
夢どころか
サア大變だ
妾の寢床
物凄い MENSTRUATION

男

卓子の下で
もの柔い觸感に
吸はれる心
呼吸の塞るやうな
髓まで痺れるやうな
烈しい誘惑

「ゲーム」と女は叫ぶ
何か云はうとする
眸が――女の眸が抱き竦める
卓上に
ゲームは一夜つづく

夜は明ける
寒氣と空腹に震ひながら歸る
ポケトには
一錢だつて殘つてはゐない
女は
さよなら一つ云はない

樹木——男

樹木だ
一本

樹木——樹木
幹
枝
小枝

葉

光　陰影
生——樹木——一本
葉綠だ
葉綠　葉綠
葉綠
男——一人
一人
突立つてゐる

樹木だ

樹木　たった一本
男　男　男
一人
それだけ

さうだ
それだけだ

人形は産みつづける

いつも來る街だ
毎日
新らしい衢だ
この都市に
人形ばかりが巣造つてゐる

人形は

無數に殖えてゆく……
不思議な夢が
ひつきりなしに
人形を産む

腹から
その腹から
人形は産みつづける

酒酒酒

徳利
徳利
徳利徳利
徳利
徳利徳利
徳利
八本

徳利八本

卓子一脚

男　沈默　飲む

酒

酒

酒

午前　二時過ぎてゐる

森閑

女――一人

給仕女　居眠つてゐる

居眠る顔

女の顔　色　眞青

髪毛ちぢれる

襟首眞白　白粉だ　白粉

肥つてゐる

帶――斑點――褪色――燒穴

モスリン

女一人

居眠つてゐる

Gon gon gon

餘韻——秒 秒 秒
秒
秒
無限
男 一人
飲む
酒
酒
酒

考へる男

考へながら
一人の男
三年
五年 また 十年
もつと先きまで
唯一つ淋しい
歡喜 否

生命そのものである男
彼を知つてゐる
私は
視てゐる
觸れてゐる

彼だ――一人の男
目的を有つ
で　愕かない
烈しい變異にも
彼は云ふ
「當然だ

強い興味の源泉だ
其處に　人生が在るんだ
眞價だ――生存を
認識するための

驚かないよ
俺は」と

玩具
達磨を想像しろ
轉げて立つ
その安定を――人生觀か

かうした一群が
他の群が
流れ込む無數の墓穴
大小の
不思議な逵摩を抱いて
前のめりに
のめり込む墓穴

累々
この寂境
佇むたびに　冷えびえと
墓石の肌を見詰め

魂
舞臺に躍る
喜劇「逵摩の大小」
嚴肅と　安價とが演ずる
悲劇「考へる男」
その一場

鳶　一羽舞ふ
私は知らない　有限か
無限か
青々と空は高い
思ふ

「ほがらかだ」
光　色　私
私は立つてゐる
突立つて
確かに　意識する

心

「妾
死ぬほど
辛い思ひをしたわ」

男は
きうにうなづいた　が
頭脳には

なんの關係もない
明日の仕事を考へてゐた

「あたただけは
分つて下さるわ　ねえ
妾の氣持を……」
「ああー
どうだらうか　なあ
明日の天氣は」
「大丈夫よ
星が
降つてるぢやありませんか」

心は
彼にささやいた
「あんな女に
きかなくたつて
お前に
ちやんと分つてるんだ」
また彼は
うなづいた
しかし　何にも
分つてゐなかつた
そして　ちやんと分つてゐた

それでゐて
分つてゐないんだ

この一瞬

死ぬ。
產れる。
泣く。喚く。
氣が狂ふ。
へたばる。のたくる。
跳ねあがる。
踊る。舞ふ。

突き飛ばす。
裸身。交接。褌衣。襤褸。大禮服。
流行する。時代遲れ。
破產。强制執行。藏が建つ。
貴族。私生兒。野良息子。才子
多病。薄命。不良少年。
うろつく。濶步する。
拘留。宿直。
大道で犬が交尾む。
中流婦人の萬引。坊主の人殺し。
停電。
活動寫眞のニコニコ大會。

慘めな葬列。
日比谷太神宮の物々しい結婚式。
車夫汗みどろ。
ポイント・マンの大あくび。
幫間のイヒヒ笑ひ。

この一瞬

夢を喰ひ破る

追憶の夜――夜更
犬が吼える

なま白い地平の極限から
忘れはてた魂を
呼び醒さうとするのか
闇夜

その底に
眞黑な犬が
咆え猛るのだ

市街は
顫えて立つ寒む空に
その十字路に
陰影と陰影
相抱く無邊の荒土
おお　なにものの咆吼か
かくまで
私の夢を喰ひ破ると云ふのは

犬が吼える
闇夜
なにものも無い十字路
陰影に
その陰影に
吼えつづける
眞黑な犬

一匹の犬が
狂氣の如く吼え猛けるのだ

「明日」の假面

——栗田青雲君に贈る——

「今に見ろ！」と
殴り飛ばすぞ
假面と
裏に慄えあがつてゐる奴を
彼奴らは
傳統の物蔭で
何を謀ぎうとするのか

俺には「明日」なんて
生ぬるい獨白が
不用なんだ

刺すなら
刺せ　舞臺の板まで
笑せやがる
木偶の群

きさまだちの存在が
存在と認められる
あやふやな世界

さうだ
俺は勝手に
夢を見るんだ

二つの翼

——日夏耿之介君に贈る——

一つの翼は
飛ばうとする
他の一つが
抱かうとするのだ

二つが
風を孕んだとき

宙を切る
その羽音を聞かうとするのは
誰か
そしてまた
二つが抱き竦められた時
覗かうとするのは
いったい誰れなのか

翼は　ゆくがまま
翔けるがままに
忘られたものの隙間から
はかない烟のやうに

とりとめなく
跡方もなく
消えてゆくと云ふのに……

はるかに
打ち仰ぎながら
蒼空
はてしなく
其處に何が取り残されるのか

翼だ
いや翼ではない

虚空に巻きあがる
怪しい羽音
消え入るばかりにも
かすかに　かすかに羽音
尾を引いてゆく

斑馬と裸娘

虚飾の皮
ヒンめくる
虐らしい眞夏の一夜
堪えきれぬ熱氣と
饐える體臭と
それら萬華を鏤めて地軸を歪め
轟く

轟くは百鬼行進曲

見ろ！
其處に釘付けされた野良の顏面を
早發性痴呆か　賢虚か
魂と云ふのは
ケツから脱けてゐるものか

幻覺の吊燈　錯覺の緞帳
强烈な色感が闘く
夢幻の世界
その中心の裸身の娘

裸娘の群
惜氣なき肢體の隊列
みな脂ぎる
それらの喰ひ込むものは
汗ばむ斑馬の肌か
邪淫の凱歌　轟く轟く雜樂
DAD DAD DAD
DA DA DA　……
DA DA DA　……

月を取らうとする男

——London に在る俊郎君に——

「日が暮れかけると
慌しく
山路を馳けあがつて
月を取らうと
頂上で
一人さみしく毎晩
私の父は

氣を採んださうです
それから間もなく
父は逝くなりました」と
酒をなめながら
友は　ある夜
ふと　私に談りました

ぢつと視つめてゐると彼の眸に
かれの父そつくりな
怖ろしい欲求が
あまりにありありと動いたので
突然私は叫びました

「やめて呉れ給へ！
その話だけは」

それからか
私は
なんのためとも知らず
この友が
たれよりも私になつかしい
男になりました

蒼白い臭氣

――ある田舍の盆踊にて――

蹂み躙られる
蒼白い臭氣
其處に
盛れあがるものは
とめどない催淫

夜露

こぼれる

若者ら
肉そそらす情熱の篝火
慾求の奏樂
眞夏の夜
そして性慾昂進症
蒸せ返す體臭
陶醉の谷
陷ち込むは
無數の感覺痲痺の形骸か
觸れ合ふは血球と

魔酔の彈力

不思議な
時間は
無限に伸びゆく

糜爛

一望坦々
畑中
きらめく炎天

脅し突立つ
煤けきつた工場
異様な形體

破産が捨てた工場か
窓硝子の粉碎
塗料の剝落
その眞暗の内部に
湧きあがる
緘默の大響音

怪蛇卷くどぐろか
ぎらぎらと
この工場をめぐる
錆色した鈍重な腐れ水
それから發散するは

刺戟性の毒氣か
おお　それに浮ぶ
横腹を曝す
ぶくぶくの水脹體
牙露き出す怖ろしき糜爛
三毛猫の屍骸
烈日に
燒かれ焦かれ
靜かに　最も靜かに
それが浮んでゐる

荒野に墓を發く

その群れの先達らしい
大きな一頭が
もの凄く
丘の上で叫びつづける

數十頭の一群は
狂はんばかりの咆吼

それにしては
あまりに沈んだ鍛嗄聲
見る見る丘上には
大小無數のハイエナの獸群
灰黑の天空にすかして
幻影のやうに搖れる

うなだれながらも
辷りおりる老猾の一頭に
導かるるのか
一群は
夜露に濕る砂塵を蹴飛し

われ先を爭つて
はるか部落めがけて
最後の疾驅

燈影一つ無い
絶域の
死より靜かな夜の底
邊際に顫える星屑さへも
地上にまで
送るべき光打ち忘れた
この時
微かと云ふよりも

より微かな
地より搖れあがるらしい
不思議な薄明に
かれら一群は
何ものかを探し當てたやうに
聲をひそめ
感覺を彼等の歪められた
鼻先に集中して
一筋の
怪しい路を辿つてゆく

小高い

不思議な丘陵に
枯株のやうに　ところどころ
突立つ腐れた標木
その根に
かれら一群の
物凄い作業は始められた
見る見る
微かな音を立てて
標木は倒され
黴臭い温まつた
土中の微風
それとともに掘り出される

怪しげな肉塊
一群は
鳴りを沈め
ただ牙咬み合す
凄惨の一時……
……
夜――不吉な夜
明けはなれ
其處に
無數の亂雜な獸群の趾跡
それが唯一つ
彼等部落民に取殘された

祖父の形骸か
墓は發かれ
骨片は
さりげなく散らばつてゐる

小汚い運河

宇宙の肌に
憂鬱色の黴を塗り
窒息させる　惡鬼の奸謀か
霧霖は
永劫を濁水で
運び去るかのやうに
街路を慘憺そのものに化した

刺々しさに煽られ
劫雨を犯し　濁流を亂し
小穢いその運河を――貧民窟の一角を
曲らうとする時
臭氣とともに溢れる塵芥と
怪しい陰影を
私は見た
蹲る痩せぼうけた女
血の氣失せ
骨さながらな兩手で
顏を蔽ふ

不氣味な女を

なんと云ふ不思議か　まさしく
一人の娘が立ち現れた
美しい娘が
其處の　崩れた壁
朽ちた柱で危く支へられた
妖婆の洞のやうな小屋
その闇の奥から
この空氣には
なにの連絡もない
匂ひと　不思議な輝きを放ちながら

娘の顏には
前徵も　不吉な暗示も
陰さへ潜めず
閃くやうな聲音で
敎へてくれた
立ち竦んでゐる私の足もとに
その濁流に　怖ろしい
不思議な溝があることを
そして私は
なんの危難もなく
いつか其處を離れてゐるのに

ふと氣が付いた

反對の街角で
急に振り返つて見たとき
娘は
濁水を涉り
躍んだ女の背後に佇み
なにか囁きはじめた
しきりと
なにかささやかれた　が
女の返答も
娘の聲も

聞へようものか
闇夜にとどろく
劫雨の呪詛と
物凄く煽りたてるは
糜爛の臭氣
脅しながら只一人
突立つ私を襲ひまくるばかり

三人のバガボンド

三人の若い男
破壊された頭腦に
必要だつた
強烈な酒が　爛れた肉が
歪んだ卓子を圍む
三人

憂鬱　そして沈默　そして呻る
多量の酒
突然爆發する
酒精導火線——血管に　心臟に
頭腦に
重苦しい弛緩は
刹那に飛散
心氣濛々
明らさまな
慾求の交叉——賣買
男女の絶叫
演じ出された淫悅と

底なきまでの　狂態
それらの光景——昨夜の現實さへ
今　美しい惡夢の蠱惑
盛れあがる憧憬か
不思議な偉力
何ものの手が止めると云ふか
盞のなかに
沸り返す魅力と
その幻影

差別を滅して
いきり立つ若者——三人のバガボンド

彼等はいま
夜陰の靜寂を爆化して
叫ぶブラボーの歡呼
瞳孔
ゴッホの狂熱を奪ひ
燃燒　そして發光
怪光は四邊に
鋭く放射し
刹那に　また　永遠に
灼熱　又　灼熱
またも
まきあがるブラボーの歡呼

暗紅色の氷柱

——ある男の西伯利亞實話——

シベリアべた一面
早い話が
氷の底さ——零下三十幾度
午後十時
双のやうな世界だ
馬車と云ふのが
丸太棒に藁さ

凄いぢやないか
そいつが　なんの事はない
プラチナの針金のやうなんだ
その上に
畜生の毛皮を幾枚も引き冠つてさ
ろくでもない
達摩の苦行

オムスクから二十幾露里
蹄鐵のスパイクも
凍てつく極寒だ
こんな晩に

饗くベルと來ちや骨どころか
髓まで泌みるぢやないか
づきづきと
刺し通すんだ
形容ぢやないぜ
丸太小屋に
繋がれた橇引犬どもめ
咆えるは哮えるは
仕方もあるまい
吼えなきや　彼奴らの
生命が凍てつくんだ

GUA LA LAN
GUA LA LAN

出抜けに
二頭の馬は逆立さ
跳ね飛ばされるのに
君　何の不思議があるんだい
これは又
なんと云ふ光景だ
丸太棒の上に
並べも　並べた三つの屍體
それが　みな處女なんだ
愕いた　ねえ

しかもだ
それが凄慘極りもない局部出血
震ひ上つたよ
その局部からは
まるで權利のやうに
暗紅色の氷柱

絹のペチイコート
どう見たつて貴族の娘だちだ
零下三十幾度——氷の褥だ
血に飢えた狼群——コザツクの
許し難い凌辱だ

絶境の惨劇だ
君
かれらの眞紅の血潮は
なにに役立つたのか
おお　清淨無垢な
氷の十字架
これ以上の殘忍が　凄惨が
何處に在ると思ふか

シベヤアの娘だちよ
明るい光の下で
ただ一人の男も見逃してはな

らないぞ」
眞實　かれらのために
おれはかう思つたと
瞳子に
怪しい光を放ちながら
わが放浪の友は
極北の惡夢にうなされたやう
虚空に
なにかの陰影を追ふやうに
ある夜更　私に
物談つたのだ

異様な啼鳴

じめじめと
秋らしい夕暮れ
とある郊外を通つたとき
うら淋しい路
古びた僧院の石塀に
蔦茂る
その破れ目から
僧房の一部が

靜寂の底に覗かれた
と　軋るやうな
光るやうな
異様な啼鳴が
其處から漏れた
見ると
ほの白う光る
黄昏れどきの濡椽に
もの靜かな障子を背にして
蹲つた一人の僧は
かれ自身の身丈ある
金屬製の鎚を開け

いま　餌をやるところらしい

馴染まぬ異國の鳥は
恐怖に羽搏き
また擘くやうに　急に
不氣味に叫ぶ
「畜生め」
あららかな聲が
叫び返した
しつとりした此の大氣を破り
不快なものが
思ふさま

この寂境を
蹂み躙つて了つた

SPHINX

——ある陽性燥狂者の言葉——

「地上に
卸されたる
最初の謎である」と
誰れかが云ふ
すると
また　たれかが
それに耳を貸すのだ

火雲星(ネビュー)のそれか
カント　そしてラプラス
しかる後
誤つてアミーバが
ダービンの尖つた眼球の
その先端で
二つ　二つと云ふ風に
切られて無數に
殖えたとして
それがまた種の起源となつて
適者生存とか

自然陶汰とか物々しい
御託の如く
人類が野猿坊の
兄弟で
山椒魚の親戚であつて
鯰の孫だと相場が決まるとして
毛蟲が總身の毛を寄立てて
喰つて掛らないとも
限るまい
古い　たれからも忘られた
脚疵の穿鑿沙汰
洗つて見れば一つと知れたとして

それが何に値するのだ

ニュートンが
かの頓馬野郎が
たとへ比喩であつたとしても
頭蓋をしたたかに
林檎風情に打たれて
やつと正氣に復つたのか
さて
それからずつと世紀を
繰り下げた今日
彼れの學說とかを根柢から

覆したと云ふ評判男が
五里霧中を
そのまま論理に兩替したやうな
手のつけられぬ御土産物
高が島國根性
なんでも走りが珍重される
いかもの喰ひ
珍客來るとばかり
下にも置かぬもてなし振り
それで何の應報が御座つたがと
自分に訊いても分るまい
日本ムスメの

赤いキモノ　そして日本の
お芝居ドラマに現を抜かし
ホテルの一室に
閉ぢ込りしところ
これ正に相對性原理の實驗か
さもあらぬか

おお　かつて
地上で叫んだ　しかも
いまだに草臥れない不思議な
かれ SPHINX は
なんの響も

手ごたへも無いかのやうに
叫びつづける

死の勝利を
かつて叫んだイタリアの貴公子
むしろ彼は一ケの伊達者
かれの旅行鞄の内部に
たとへ一ダースの絹靴足袋と
三ダースの
絹手巾が在るとして
また　玩具より一歩も出ない飛行機の上で
それがひらひら棚引くとして

美津五郎あたり
檜舞臺で
羽衣を演ずるより
興ざめる技ぢやないか
エルサレムの詩人
いな道樂者――かれキリスト
かれの醉狂が
この地上に何程の光を浴びせてゐるのか
天上天下唯我獨尊
それが松澤病院の金看板でないまでも
愚民を釣る
方便を離れては

存在の稀薄な事實をどうしたらいいのか
すべては一歩と十歩
十歩と百歩
ただそれだけの相違なのだ

虚空で勝手に
そして思ふ存分に　隨時に
放電しやうとする
結構な代物を
狹苦しい鑵詰や瓶詰にして
市場で
格安に卸さうとする

人間仲間に
謎なんて言葉を使はして
その舌の根が
爛れ落ちないのが
まだしても　科學者　否
醫藥の途でもあらうか
やれ　ネオ・ネオ・アセーミンだ
鼻は落ちぬ先に御用心
新藥だ　やれ
ドクトル・メチニコーフの
ビオヘルミンだ
やれ外科手術上の

一大福音だ
鹽化アドリナリンだ
また贅澤に
腹一杯喰つてタカ・ヂアスターゼだと
ちやんと分つてゐる
それでこそ
セント・ミシシツピーの河畔
日本建築——屋敷
それ大變よろしい！　見事　見事

あなた方は
夜な夜な

地底から來る　あの怪しい
呪はしげな聲に
あの物凄いものに
お氣付き召さらぬよな
いや　それは
何より結構な御身分で御座るわい
おれは　ただ
あの聲が
生れぬ以前から
總身の毛穴に浸み込んで
どうしていいやら
いやはや

氣が轉倒しさうぢやわい！

「あの
ちよいと
お訊き申します
みなさまの
ほら　最初の謎の事で御座いますの
おほほ　ほ……」
やめてくれ
後生だからよ
それだけは
命は

お前にやつてもよい
ただ　それだけは止してくれ
たのむ　拜む

さては未だ
俺の　この願ひが
通じぬと見えるわい
また
あの物凄い聲音
靜かで
さうして消え入るやうな
あの執拗な

女の壁

もう駄目だ
なにが俺を救つてくれるのだ
駄目だ
この地上には
一つの光もない
半分もない
かけらもないのだ
「最初の謎
お分りになつて？」
また始めやがつた

いけない
止してくれ！　よせと云ふのに

目を瞑つても
はつきり煌く
怪しい文字
この虚空の怖ろしい文字
此の文字
謎　謎と云ふ文字
謎　謎だ
最初の謎

謎謎

大正十三年五月八日印刷
大正十三年五月十七日發行

萬物昇天　定價壹圓貳拾錢

著者　相川俊孝
東京市牛込區田町二十三番地
發行者　冨永直樹
東京市牛込區白歌町一九八番地
印刷者　大杉直次郎
檢印

發行所　東京市牛込區田町二十三番地
新詩壇社
振替東京三一〇〇四番
電話牛込一四三四番

島村民藏氏著 劇の創作と鑑賞 四六判上製 定價貳圓參拾錢 送料十二錢

川路柳虹氏著 現代藝術講話 四六判紙裝 定價壹圓八十錢 送料六錢

野口米次郎著 ヨネ・ノグチ代表詩 四六判紙裝 定價壹圓五十錢 送料六錢

相川俊孝詩集 萬物昇天 四六判紙裝 定價壹錢廿錢 送料四錢

生田春月氏著 感想集 智慧に輝く愛 四六判紙裝 定價壹圓四十錢 送料六錢

290
816

終